

# 全盲でダウン症を伴う子どもとの楽器を共有した 初期的かかわり合いに関する事例的研究

福田 史江

## I 問題

視覚障害を伴う障害の重い子どもは、「見えない」ことから、「ブラインディズム」と呼ばれる、目を押す、身体をゆする等の自己刺激的な行動に向かいやすいといわれている。さらに、「できることに大きな制約」があるために受動的・依存的となって、周囲に向けた「発信」が乏しいのではないかと考えられる。

そのような状況にある子どもと双方向的コミュニケーションを築いていく上で、音と振動を伴い、アクションを起こす結果「音」として表出する楽器を子どもとの活動で共有する形で用いることで、子どもの表出が促されると考える。さらに、かかわり手はその活動において、子どもの表出に対して共有するかかわり合いを進めることで、子どもの表出はかかわり手への発信行動となり、双方向のコミュニケーションが成立していくと考える。

よって、視覚障害を伴う障害の重い子どもとの双方向的コミュニケーションに向け、最初期のかかわり合いを検討することは意義深いと考える。

## II 目的

本研究では、全盲でダウン症を伴う子どもを対象に、楽器を共有したかかわり合いにおける、子どもとかかわり手との相互的活動の様相を事例的に明らかにする。

## III 方法

### 1 対象児

早期療育施設に通園する全盲のダウン症幼児 A (以下、A 児とする;本研究開始時、6 歳 2 カ月)。

快・不快は表情や発声で表現することはできるが、発語はみられない。聴覚的な反応は敏感であり、モノへのかかわりとしては音の出る玩具や楽器(キーボード等)に手を伸ばして鳴らす様子がみられ、人への行動としては手に触れたりする。

積極的に移動する様子はほとんどみられない。

## 2 相互的活動の状況設定

本研究では、「子どもとかかわり手とが一つの楽器を共有する形で活動を行い、子どもの表出行動に対してかかわり手が寄り添う形で子どもの動きに重ねてみたり、まねてみたり、あるいは反響させてみたりする応答的なかかわりをする」ことで、子どもの表出行動とかかわり手の応答的な活動が相互の関係性を成立させること」と定義される、相互的活動を行う。

その際、Coupe ら(1988)による「大人と発達の初期段階にある子どものやりとり

(interaction)の場面において大人と子どもの両者について常に考慮される 7 つの視点(川住, 1999)」及び松井(1989)の「音楽的技法 BED - MUSIC」を参考にする。

### 1) 使用する楽器

キーボード(KB)、タンバリン(TB)、オーシャンドラム(OD)、ギター(GT)

### 2) かかわりの方針

- ・ A 児の表出行動(-); 音楽を伴う、もしくは先行した働きかけによって誘発する
- ・ A 児の表出行動(+); A 児の表出行動を模倣したり変化させたりして応じる

### 3) 資料収集の方法

毎回の活動をビデオ映像に記録する。

## 3 資料分析の方法

### 1) 相互的活動の様相に関する分析

A 児とかかわり手 F (筆者; 以下、F とする)とのコミュニケーションの様相を構造的にみていくために、三宅ら(1974)によるコミュニケーション単位(CU)及び相互作用単位(IU)、伊藤・西村(1999)による相互作用成立水準に関する基準(表 1)に基づき、各楽器活動全セッションのトランスクリプトを作成し、相互作用を分析する。

表1 相互作用の成立水準に関する基準(伊藤・西村, 1999)

成立水準・状態	型	成立基準
A水準 (相互作用成立状態)	A-I	かかわり手 → 対象児 → かかわり手 →
	A-II	対象児 → かかわり手 → 対象児 →
B水準 (相互作用成立寸前状態)	B-III	かかわり手 → 対象児 →
	B-IV	対象児 → かかわり手 →
C水準 (相互作用不成立状態)	C-V	かかわり手 →
	C-VI	対象児 →

2) A 児の楽器及び F に対する行動目録の作成

各楽器活動における活動が続いた／続かなかったセッションのトランスクリプトより、A 児の行動を抽出する。

3) F の働きかけ・受け応えの類型に関する分析

各楽器活動において、相互作用成立状態 (A 水準) の値が高かったセッションを取り上げ、F の働きかけ・受け応えの傾向を分析する。

IV 結果

計 9 回の活動に関する相互作用成立状態、A 児の行動目録、F の働きかけ・受け応えの結果は以下の通りである。

1 相互的活動の様相

相互作用開始率 (図 1) は、KB 及び OD 活動は A 児から、TB 及び GT 活動は F から相互作用が開始されることが多いと明らかになった。

加えて、各楽器活動のセッションを通して、各楽器ともに相互作用成立状態である A 水準の値が 40% を越えていることがわかる (図 2)。

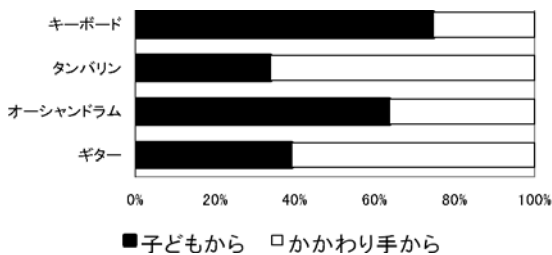


図1 各楽器活動における相互作用開始率

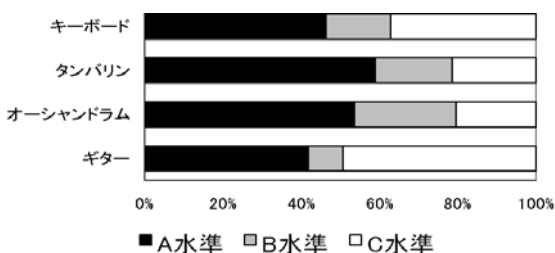


図2 各楽器活動の相互作用成立状態

2 A 児の楽器及び F に対する行動

A 児の楽器に対する行動は、F が受け応えをする上では重要なきっかけとなり、また F に対する行動は双方向のやりとりを築く上では直接的なやりとりに発展する重要な行動であると考えられる。

A 児の楽器及び F に対する行動として、最も頻度の多かった行動を、表 2 及び表 3 に示す。

楽器に対する行動を示す表 2 から、KB 活動においては手指によって音を鳴らす行動が最も多く、探索的な動きと受け取れた。TB 活動では F が主導と受け取れるが、A 児にとって自分が面をたたいているように感じることでできる状況である。OD 活動においては OD を動かすために欠かせない、活動の流れの主要な一部となる行動である。GT 活動は接近行動、活動の後半もしくはあきたと思われた時にうつ伏せするという反対の性質を持つ行動がみられた。また、F に対する行動 (表 3) は、KB 活動では行っていたこと止めるという行動であった。TB 活動では、面をたたいている F の指を反らせるという行動がみられた。OD 活動については各行動一回ずつしか表出されず、GT 活動について F に対する行動はみられなかった。

表2 A 児の楽器に対する行動目録

楽器	Aの表出行動
キーボード	鍵盤を小刻みに動かして鳴らす ・鳴らす音を変える ・音の大きさを変える ・テンポを変える ・鳴らすリズムを変える ・音をたどりながら鳴らす
タンバリン	ハンド・アンダー・ハンドで Fと一緒にたたく
オーシャンドラム	面を上方向へたどる(面→胴) ※1 次の面へたどる(胴→新たな面) ※1 面の上に手をのせている ※2
ギター	絃の上に手をのせる

※1 音を鳴らしていない時  
※2 音を鳴らしている時

表3 A 児の F に対する行動目録

楽器	Aの表出行動
キーボード	Fが鳴らすと、鳴らすのを止める
タンバリン	たたいているFの手に触れ、指を反らせる
オーシャンドラム	Fが面をたたくと、Fの手の下に滑り込ませる Fの手を面から放すように、持ち上げる

### 3 Fの働きかけ・受け応えの傾向

相互作用成立状態（A水準）の値が高かったセッションにおける、Fの働きかけ・受け応えを類型化し、Fの働きかけ・受け応えの傾向を明らかにした。各楽器活動において、最も頻度の高いFの働きかけ・受け応えとして、KB活動ではA児が示した音に対する模倣（同型的）／音・タッピング・言葉かけ、TB活動では音楽を伴う誘発／音・モデリング、OD活動ではA児の動きを活動の展開につなぐ表出確認、GT活動ではA児の動きに対する応答（異型的）／音となった。

以下、類型化におけるカテゴリー（表4）及び各楽器活動での類型化したFの働きかけ・受け応えの内訳（図3）を示す。

表4 類型化におけるカテゴリー

Fの働きかけ・受け応え	定義
表出確認	子どもの身体部位に軽く触れ、子どもの表出行動に応じた言葉かけを行う
模倣(同型的)	子どもの表出行動と同じことをFも行う形で応じる
応答(異型的)	子どもの表出行動が楽器、もしくはFに向かっている場合に、模倣(同型的)ではない形でFが楽器を伴って応じる
誘発	子どもの表出行動が楽器、もしくはF以外に向かっている場合に、楽器やFに注意を向けるよう促す
誘導	子どもの表出行動がみられない場合に、子どもを活動に促す
言葉かけ	言葉だけ発する

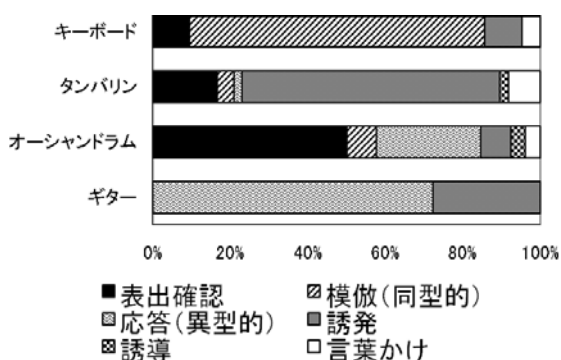


図3 類型化したFの働きかけ・受け応えの内訳

### V 考察

相互的活動において、KBとODはA児にとって行動が起こしやすく、Fの音による模倣や表出確認による働きかけ・受け応えが、さらにA児が主導となる活動の展開を支えていたと考えられる。それに対し、TBとGTはFが主導であったことから、A児にとっては行動の起こしにくい楽器であることがわかった。しかし、Fの音楽を伴った誘発及び音による応答と受け応えによってやりとりをつなぐことができ、活動の展開を可能にしていたと考える。

本研究では全ての楽器活動において、相互作用成立状態であるA水準が40%を越えていることから、相互的活動が成立していたと考える。

視覚障害を伴う障害の重い子どもとの初期的かかわり合いにおいて、子どもとかかわり手とが一つの楽器を共有することで、活動をも共有できる状況へ導くことが可能となり、子どもの表出が生じやすい状況となった。また、その表出行動に応答的にかかわることで、子どもがかかわり手に向かう状況を作り出すことができたと考える。

このようなかかわり合いこそが、今後、双方向的コミュニケーションの形成・促進へつなぐためには、欠かすことができないと考える。

### 文献

Coupe, J., Bardar, M. & Murphy, D. (1988) Affective Communication. In Coupe, J. & Goldbart, J. (Eds.), *Communication before Speech*, Chapman & Hall, London, 31-47.

伊藤恵子・西村章次 (1999) 自閉性障害を伴う子どもの相互作用成立要因に関する分析的研究. *発達障害研究*, 20(4), 316-330.

川住隆一 (1999) 生命活動の脆弱な重度・重複障害児への教育的対応に関する実践的研究. 風間書房.

松井紀和 (1989) 音楽療法. 伊藤隆二 (編), *心理治療法ハンドブック*. 福村出版.

三宅和夫・岩井邦夫・伊藤則博・後藤守・浜名紹代・白井博・吉村紀子 (1974) 乳幼児発達研究法の探究. *北海道大学教育学部紀要*, 22(3), 1-66.

土谷良巳 (2006) 重症心身障害児・者とのコミュニケーション. *発達障害研究*, 28(4), 238-247.